

平成30年度 第2回 尾道市公立大学法人評価委員会 議事要旨 (案)

日 時：平成30年7月31日 (火) 14時15分～16時15分

場 所：尾道市立大学E棟1階120会議室

出席者：尾道市公立大学法人評価委員会 堂本委員長、瀬戸委員、高垣委員、
豊田委員、萩原委員

事務局 中津総務課長、岡総務課長補佐、石井主任
公立大学法人尾道市立大学 中谷理事長、菅理事、藤沢理事、寺山理事
邵経済情報学部長、吉原芸術文化学部長、
有吉教授、松浦企画広報室長、堀江係長、
森下主任、三上主事、斎藤総務課長、
土岸総務課長補佐、崎丸学務課長、

報告事項：1 平成30年度第1回尾道市公立大学法人評価委員会議事要旨について

- 議 題：1 平成29事業年度に係る業務実績評価について
2 第1期中期目標期間に係る業務実績評価について
3 その他

【報告事項】

- 1 平成30年度第1回尾道市公立大学法人評価委員会議事要旨について

平成30年度第1回尾道市公立大学法人評価委員会議事要旨について事務局から説明を行い、審議の結果、一部文言を修正したうえで、全会一致で承認することとし、速やかに公開することとした。

【議 題】

- 1 平成29事業年度に係る業務実績評価について

平成29事業年度に係る業務実績評価について、事務局から説明を行った後に、次の意見が出され、全会一致で承認された。

(委員) P.44の第7では、評価項目が2つしかないため、1つでも評価を下げると大項目評価結果がCに下がる。もっと柔軟に評価ができれば良いと思う。また、もう少し項目が多ければ良いが。

(委員) 見える形の評価にしようとするとう仕方がない。項目が少ないと1つの評

価を変えると大項目に影響するのは仕方がない。基本的には大学が自己評価をした後に、委員がそれで良いかどうかを見る。客観評価とは少し違うと思う。外から見れば頑張っていると見えていても、委員から見てもっと頑張る必要があると考え、評価を下げるのは委員の捉え方で良いと思う。

(事務局) 第2期の評価については、中期目標及び中期計画の数を大幅に減少させたこともあり、そうしたことに対応するための評価方法を次回の評価委員会でご議論いただきたいと考えている。

(委員) 大学が常に改善努力をしていくのは当たり前の姿で、少し何かをしたから評価を4にしようというものでもない。大学教育は動いているので、常に対応していく必要がある。国立大学の視点で捉えるのと、尾道市立大学で捉えないといけない視点は、違うと思う。最終的に市の評価を見て、委員の立場で是非かを判断させてもらう。

(委員) P. 44の第7(1)①で、年度計画は外部資金の増額に取り組むとなっているが、法人の自己評価では受託研究数をあげており、委員の評価意見では外部資金の増額に努めて欲しいとなっており、チグハグになっている。実際のところ外部資金の額は、増えたのか、減ったのか。

(法人) 少し減っている。

(委員) こうして評価が3から2に下がっているが、P. 4の2⑤とP. 7の(4)イに、この件が特徴のある取組みとして抜粋されている。件数は減少しているが、地域のニーズに答えているという趣旨なら、このままでも良いと思うが。

(事務局) 成果をあげた計画を掲載している項目であり、削除させていただきたい。

(委員) 同じようなことで、P. 46の第8(2)②では、大学のウェブサイトの中国語への翻訳作業を開始するとなっているが、自己評価では具体的な工程や問題点について検討したとしており、翻訳作業を開始していない。達成していないと思えるが、評価は3になっている。

(委員) 大学の自己評価を信じて委員が評価するのが実態であり、そういう意味で大学が自己評価を的確に行えるかが重要である。外部からの客観的な評価は、7年に1度、評価機関から認証評価を受けるようになっている。

委員は、大学としての努力、成果、向かっている方向が、是非これでいいと示すのが務めだと思う。大学も委員の思いを汲み取って欲しい。もっと頑張りたいのはどの項目もあると思うが、成果がいまひと

つ上がっていない部分もあると思うが、大学が頑張っているのを評価する。
共同研究も受け止め方が様々で、大学の自己評価では実態が見えていなかった。大学からの説明を聞くと、何件やっており、研究の成果を出していると説明があったので、理解することができ、評価を行った。

2 第1期中期目標・中期計画に係る業務実績評価について

第一期中期目標・中期計画に係る業務実績評価について、事務局から説明を行った後に次の意見が出された。

(委員) P. 5の(2)評価概要ア(ア)において、①でカリキュラム・ポリシーとディプロマ・ポリシー、⑦でアドミッション・ポリシーの作成について記載されているが、セットで扱われることが多い。項目を合わせて、1つにしてはどうか。

また、中期計画、年度計画に掲げていなかった項目で、特質すべき実績をあげた場合に、記載することができる欄を設けることも必要ではないか。

(事務局) ①と⑦を合わせることにする。また、特質すべき実績の記載については、第2期での評価方法へ反映させたい。

(委員) 全体の業務実績評価としては、これで良いと思う。

最後に、委員から大学に向けて伝えたいことを1人ずつ言ってもらいたい。

(委員) 経済情報学部の地域貢献は、ゼミ単位で行われているが、活発ではない。美術学科のデザインは必須科目になっており、地域活性化企画を達成しないと卒業できない。だから出てくるコンテンツのレベルが非常に高い。経済情報学部においても、地域貢献活動を必須科目にしてはどうか。経済学的に尾道の商業はこうあるべきとか、街が発展するための助言ができるような地域貢献、そういった地域貢献できれば良いと考える。

また、今後の少子化の中で、どう差別化して大学を存続していくかが重要である。特別な取組みをしていかなければ、学生の質が下がる可能性が高い。尾道市立大学の経済情報学部では、特別なスキルが身に付くような、他の大学ではやってない取組みをすれば、大学として価値が出ると思う。

(委員) 魅力的な大学になるよう、2期の中で実現するように考えてほしい。

(委員) 経済情報学部でブランド化を目指すとの記載があり、具体的に聞いてみると、まじめで優秀な学生を育てるとの回答であった。どこでもそこは目指すと思うが尾道市立大学らしさとは何かを考える必要がある。

(委員) 経済情報学部には一層発展していただき、優秀な人材を供給していただ

きたい。

(委員) 尾道市立大学の地域貢献は、だんだんオープンになってきており、大学が地域に開けてきた実感はある。国際交流は留学希望者も増えてきていて、力を入れていると感じる。経済情報学部は、もう少し尾道らしさ、尾道で経済を学ぶ意味を考えた上での発展があることを望む。地域を巻き込みながら実施して欲しい。

(委員) 尾道市立大学は、市町や法人等と包括協定を締結しているか。県立広島大学は市町や企業等と協定を締結し、共同研究に結び付けている。

(法人) 協定締結の実績は、無い。

(委員) 包括協定を締結していれば、教員も企業等と共同研究の面において、行動に移しやすい。全てが成果に結びつく訳では無いが、土台はできる。地域にある大学としては、そういうものがあればいいと思う。現在、受託研究は、尾道市からのものが多い気がする。ブランディングは、第2期でははっきりとした方向性を出して、実態があるものを打ち出していく必要がある。

確認したいが、第1希望で尾道市立大学の経済情報学部を目指した学生は何%くらいいるか。

(法人) 前期日程の受験者は、第1希望であると思う。前期試験は、定員100名のところ約170名の合格者がいて、そのうち入学するのは約110名程度である。

(委員) 合格者を70名程多めにとるということか。特長のある大学を目指すには、物足りない。全員が第1希望で目指して来てくれるような大学にする必要がある。そういうところから議論を進めて欲しい。

評価の中で、就職の個別対応等、教員が学生に対し行っているところは大学の自己評価では3だったが、期待を込めて評価を4にした。大学としては、ここを頑張っているということを積極的に示さないといけない。市は、大学が学生をいかに大切にしている、教員が学生へきめ細やかな対応をとっているということを関係者に伝えて欲しい。

3 その他

次回の委員会は、10月又は11月頃に開催し、第2期の評価の在り方を協議する。